

# 委託事業実施内容報告書

## 平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

### 【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 財団法人箕面市国際交流協会

#### 1 事業の趣旨・目的

2008年度の取り組みの成果と課題等を受け、今年度は当協会事業に幅広い層の参加を得て相互研修をはかりながら、外国人の少数点在地域における「なにも失くさない日本語教育」に必要な視点、それを支える社会に必要なものを考える。

本市は大阪大学や JICA 等の高等教育・専門機関を擁する学園都市としての立地上、英語を解する非定住・高学歴層が多国籍にわたって在住している。そのため英語中心の非日常的な交流活動が先行しがちな半面、公共交通機関資源が乏しく流動性が低いこと等もあり、定住が長期化した非英語圏出身の外国人は埋没しやすく、情報量や社会参加に関して格差が大きくなる傾向がある。協会が設立17年目を迎えながら、地域社会で生まれ育った通訳等、次代の人材が育成されていないという実態はその結果であると言える。

こうした地域背景の中、そもそも少数点在地域では外国人は一層孤立しがちな点を踏まえ、昨年度、文化庁の委託を受けて「わたしが伝えたい『日本』」事業を実施した。その結果、外国人少数者が声や能力を持たないわけではなく、ホスト社会側がそれを直視し受容するか否かが鍵であることに気づくこととなった。これを受け、今年度は当事者の声を中心にしつつも、企画会議という相互研修の場で課題意識や視点について意識化をはかり、昨年同様、外国人講師等の出張講座を通じて個々人のスキルアップおよび現場の質的充実を支援することを目的とした。

#### 2 企画委員会の開催について

##### 【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
2009年 7月4日	豊中市立公民館	呉、太田、大谷、鍛治、鮫島、謝、エバンス、高山、崔、ネルソン、浜田、福井、奥村、荻野、中津、張、劉、若林	①事業説明 ②自己紹介、前年度の振り返り ③次回会議について	議事録参照

2009年 9月26日	豊中市立公民館	太田、大谷、謝、エバンス、高山、萩原、浜田、福井、松原、中津、張、劉、若林	①進捗状況説明 ②自己紹介、近況報告 ③企画案についてミーティング	議事録参照
2009年 10月24日	豊中市立公民館	太田、大谷、謝、エバンス、高山、崔、松原、ネルソン、萩原、浜田、福井、岩城、中津、張、劉、若林	①団体の募集状況説明 ②企画に関する担当決め ③次回会議について	議事録参照
2009年 12月19日	箕面市国際交流協会	呉、大谷、鮫島、謝、エバンス、高山、崔、松原、萩原、浜田、岩城、張、劉、若林	①模擬講座 ②グループ別打ち合せ ③次回会議について	議事録参照
2010年 2月20日	豊中市立公民館	呉、大谷、鮫島、謝、エバンス、高山、崔、ネルソン、福井、松原、岩城、張、劉、若林	①今年度事業の振り返り ②来年度に向けて	議事録参照

【写真】



→模擬授業の風景(12月19日)

### 3 研修講座の内容について

- (1) 研修講座名 「わたしは日本で生きています」  
 一少数点在地域における「なにも失くさない日本語教育」を考える一

(2) 研修の目標 昨年度事業において獲得した課題意識と地域づくりの進捗状況を踏まえ、外国人の少数点在地域における「なにも失くさない日本語教育」に必要な視点、それを支える社会づくりについて考える。

(3) 受講者の総数 418 人

(4) 開催時間数 (回数) 12 時間 (9回)

(5) 参加対象者の要件 特になし

(6) 受講者の募集方法

広報チラシの作成、または当協会の情報誌『めろん』及び市広報『もみじだより』などに情報掲載し、地域へ広報。市教委を通じて市内全小中学校へチラシ配布を実施。

(7) 研修会場

ア 講義 箕面市立第四中学校、箕面市役所、  
箕面市国際交流協会、豊中市立公民館

イ 実習 箕面市国際交流協会、豊中市立公民館

(8) 使用した教材・リソース

特になし

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
1月15日 10:50～11:50	「多文化と異文化」  “たくさんの異文化が集まる多文化の中にいることは楽しい”。在日コリアン2世の呉さんから韓国の文化紹介と自身の経験談について聞いた。	箕面市国際交流協会理事 呉寿恵	40名
1月15日 10:50～11:50	「異文化へのまなざし～二つの国の体験を通して」  学校で日本の生徒が異文化とどう接していたらよいのか、国際結婚をした中国出身の福井さんから具体例を交えた話を聞いた。	中国語講師 福井優紅	40名
1月15日 10:50～11:50	「私が日本で感じたこと」	大阪大学院生、日本語講師	40名

	台湾から沖縄、そして大阪。留学生として日本で生活した 8 年間の中で感じたこと及び台湾について紹介した。	謝福台	
1 月 18 日 11 : 25 ~ 12 : 25	「私と友達」  スリランカ出身の両親を持つ在日 2 世のネルソンさんから中学時代の生活、アイデンティティの危機で自分を受け容れられなくなった時に友達の温かさに助けられた体験談について聞いた。	英会話講師 ネルソン百合子	40 名
1 月 18 日 11 : 25 ~ 12 : 25	「私は何人？地球人として生きていこう！」  韓国に行けば日本人として扱われ、日本にいれば外国人登録書を持つ在日コリアン。“私は何人？”。在日の両親を持ち、日本で生まれ育った高山さんから日韓の歴史、自分のルーツについて聞いた。	大阪大学 3 回生 高山光賢	40 名
1 月 18 日 11 : 25 ~ 12 : 25	「教えるかわりに教えてもらう。外国のことを知ろう」  “渡日の子は自分の知らないことを知っている”。 “外国の文化を知って、自分の世界を広げるチャンスに”。ボランティアとして、外国にルーツを持つ子どもの学習支援と居場所づくりに取り組む中で感じていることを紹介した。	大阪大学 2 回生 松原光平	40 名

1月20日 10:00~12:00	「外国人当事者による体験談」  異なるバックグラウンドを持つ地域の外国人当事者から、日本に来た時、戸惑ったこと、苦労したことなどの体験談を聞き、人種・文化・生活習慣に関する様々な違いに気づき、相手の気持ちや立場を尊重することの重要性について考えた。	韓国語講師 崔聖子  英会話講師 鮫島メーリ 中国語講師 福井優紅  大阪樟蔭女子大学 准教授 萩原雅也	81名
1月21日 10:00~12:00	「インターネットの利用とメディアリテラシー」  インターネットの利用が日常化する中で、「賢明で良識のある」情報の受信者・発信者となるためにはどうすればよいかをともに考えた。	大阪大学准教授 大谷晋也	72人
1月30日 13:30~15:30	「『生活者』としての外国人が日本人に求めること」  沖縄出身のアメラジアンである講師2名を招き、日本語交流ボランティア活動において大切にすべき視点や失敗&成功の経験談を聞いた。	英会話講師 鮫島メーリ  高校3年生 ジェイダ・エバンス	25人

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

日時：2010年1月15日 1月18日	講師：呉寿恵、福井優紅 謝福台、ネルソン百合子 高山光賢、松原光平	場所：箕面市立 第四中学校
参加人数：240人		

担当の先生から

事前にフォトランゲージと調べ学習を壁新聞で発表する取り組みもしましたが、子ども達の意識には個人差があったと思います。「出会うこと」ほど具体的で分かりやすいことはないと改めて思いました。講師の方々が自分らしさに誇りを持って、日本という異文化の中で乗り越えてこられた、あるいは今も乗り越えようと奮闘しておられる姿は、十分に子ども達に伝わったと思えました。

生徒たちの感想文から抜粋

- ・ 外国の人が自分とちがうというのは当たり前で、その人には自分とはちがういい所があるはずなので、そこをさがし仲良くしたい。また、その人が日本語を話せなかったりしたら、僕が日本語を教えてあげて、その人からその国のことをきいて、おたがい教えあい知識を増やしたいと思います。
- ・ 国が違うからって軽蔑したりいじめたり絶対してはいけないと思いました。謝さんが言っていたようにその人の立場に立って考えることが大切と思いました。
- ・ 見た目で決め付けない。お互いの気持ちを理解し、分かり合うこと。自分自身と相手のことの両方をちゃんと考えることが大事。
- ・ 僕にも韓国人の友達がありました。小さい頃はなに人だろうと全然おかまいなしに接していましたが大人になるにつれて、人種や外国人と言うことにとらわれていくのかも思いました。僕は国境を越えた心が外国の人と付き合う時一番大切だと思います。

日時：2010年1月20日	講師：崔聖子、鮫島メーリ、福井優紅 コーディネーター：萩原雅也	場所：箕面市役所
参加人数：81人		
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 外国人の大半が英語を話せると思っていたが大間違いだった。</li><li>・ 日本人は外国人に対して、話し合うという意識が少ない。偏見的な見方をしているように思えた。</li><li>・ 身近な出来事ながら気づかない事も多く、再認識できたように思います。</li><li>・ 窓口対応について、あらためて考えさせられました。</li><li>・ 言葉の壁をサポートするシステムを何とか構築する必要がある。</li><li>・ 偏見や差別がいまだに多い事を実感した。考え方・見方をインターナショナルスクールのようにすべき。</li><li>・ 外国人への対応は、自分が外国で生活する想定すると気持ちがよくわかった。</li><li>・ 実体験について辛いことも含めて話してくださり、伝えたいメッセージが強く伝わってきた。多様性に対する寛容性がなければ発展もないという指摘はまさにその通りだと思う。</li></ul>		

- ・ 「みんな違って当たり前」ということは頭でわかっていても、具体的に行動を起こすことは難しいと思っていました。でも、ずっと心にとめて対応していたら、何か出来るかもしれません。
- ・ 定期的にこのようなお話しに触れることが大切であると感じた。  
鮫島さんの「誰だって違って良い。だから、その人の良い所を見よう」というのは、文化の違いに関わらず、人間同士として大切な事だと思いました。

日時：2010年1月21日	講師：大谷晋也	場所：箕面市役所
参加人数：72人		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在のネットによる情報社会が正確・精密な部分もあるが、いかにいい加減な部分が多いかよくわかった。</li> <li>・ 具体的な事例が多く、今まで漠然と理解したつもりでいたことがクリアになりました。</li> <li>・ 情報の使い方の難しさを実感できた。考え方、使用方法に注意していきたいと考えさせられました。</li> <li>・ ネットによる人権侵害が発生した時の対応事例についても詳しく聞ければと思った。</li> <li>・ 全ての情報が漏れる可能性があるという認識を持つことの必要性など、今まで全く理解していなかった。</li> <li>・ インターネットによる情報の入手の便利さとは反対に情報の流出の恐ろしさを改めて実感した。</li> <li>・ 情報を発信する際、情報を得る時も、情報開示を意識するとともに情報を読み解く力が必要と感じた。</li> <li>・ 情報の取捨選択について、情報源の特性をよく考えないといけないということを改めて認識した。</li> </ul>		

日時：2010年1月30日	講師：鮫島メーリ ジェイダ・エバンス	場所：箕面市国際交流協会
参加人数：25人		

- ・ 「心を大切に」「みんな違っている」「いいところを見ていこう」「逃げない」「前向きに」「自信を持つ」「自分がそこにいる価値観」いっぱい宝物のような言葉を学びました。
- ・ 日本人の中で肌の色がこんなにあることを知った。その中で差別をなくそうとする勇気ある日本人がいることが救いになることを痛感。
- ・ 市内在住の外国籍の方にどんどん表に出てきて話を聞かせてほしい。そういう場を国際交流協会以外の場面でも作ってほしいと思いました。
- ・ 「日本」にどっぷりつかっていたら見えない事を教えてくださいました。
- ・ 若い時にそういう場を頂き、話す機会を与えられ、話をする勇気を出した事は本当に素晴らしい事です。

## ② 実施主体からの研修内容結果評価

今年度は地域のボランティア、外国人当事者、学識経験者といった異なる立場や経験を持つ企画委員に加え、青少年枠を設けたことによって幅広い年齢層の参加が得られた。五回にわたる企画会議で箕面市における外国人市民の現状、当協会の取り組みについて各委員に情報を提供しつつ、各委員から学校、研究フィールド、ボランティア活動などの現場から、様々な情報を共有した。

公開講座は九回開催され、出張講座を依頼した団体からは「外国にルーツを持つ子どもと日本人の子どもがお互いの違いを尊重しあいながら学校生活を送っていくためにはどうすればよいか」、「外国人当事者による体験談を通して人種・文化・生活習慣に関する様々な違いを尊重しあい、相手の気持ちや立場を改めて考える研修をしたい」、「生活者としての外国人が日本人に求めることは何か、ボランティア活動をするための参考にしたい」といった声が寄せられた。地域の各現場から少しずつではあるが、多国籍、多文化な外国人市民が増えている現状を直視し、隣人である外国人市民について、まだよくわからないがもっと目を向け知ろうとする姿勢が見えてきたことは二年目の成果といえよう。ようやく第一歩が踏み出されたというところだろうが、この第一歩は、より多くの人々が今まで触れることのなかった様々な価値観や、彼らが日本の社会でどのような困難に直面しているのかを知るきっかけとなった。

加えて、企画会議や講座を通し、事業目的である、「少数点在地域での『なにも失くさない日本語教育』に必要な視点」や、「それを支える社会に必要なものを考える場」を提供できたことも一つの成果であるだろう。しかし、地域在住の外国人市民への施策が地域の実態に応じた形で展開されるまでには、非常に長期的な働きかけを要するであろう。また、今回の開催では地域の教育現場における国際理解教育の重要性が明らかになった。外国にルーツを持つ子どもが増加するなか、従来型の「3F(フード、ファッション、フェスティバル)を重視する異文化理解」から「隣人である外国市民との共生」を考える人権教育へ発展



させ、多様化するニーズへの対応と実践が求められている。

(文責：劉正宜)

### ③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

昨年度に続き二年目の実施となった今年度は、企画委員会に高校生・大学生を対象とする青少年枠を設け、より多様な視点や声を得ることができた。外国人当事者たちが「自分の体験を人前で話すことは辛い作業だが、今言わないと、周りの日本人たちはいつまでも分かってくれないよ」と互いに励まし合い、企画委員会を重ねるに連れ、「私は日本語で話すのが苦手だったが、だんだんと人前で話すことに慣れてきて自信が付き嬉しかった」と、事業を通して着実な成長が見られたことは、同じ立場の当事者たちを中心とする事業だからこそ得られた成果である。

本市は外国人が多国籍かつ少数で点在する地域であるが、普段出合えることのなかった当事者が集い、互いの思いや経験を共有し、地域へ発信することのできる場の重要性を再認識した。「共生とは何か」などの本質的な議論や自己を深く見つめなおすための話し合いは、信頼と共感が担保される環境がなければ実現できない。昨年度は「事業実施のための環境整備」をおこなったが、今年度は企画関係者についても広がりをもたせ、内容を充実させるなど、事業を開花させることができたと考えている。

これらの事業展開には、ある程度の時間が必要である。ひとつひとつ丁寧なプロセスを経なければ、外国人当事者が講師として地域で講演を行ったとしても、その内容は一般的な文化紹介など表層的なものにとどまりがちであり、地域の人々に深い気づきを与えるような厚みのある「啓発」は成立し得ない。当事者同士の語り合いを経た講演者が自らの体験や思いを語る時、その言葉には作作的な講演技法だけからは生み出すことのできない、深い感情を伴った表現力と他者の心に響く強い説得力が備わる。参加者各自は講演回を重ねるごとに、確実に自身の想いを社会に発信する力を高めることができた。

今年度は箕面市役所と市内中学校での講演を実施した。受講者からは、「言葉の裏に、『自分と同じ経験をこれ以上誰にもさせたくない』という強い思いがひしひしと伝わってきた」などの声が聞かれた。外国人当事者が地域へ発信する仕組みづくりについては、この2年間で一定の成果を得、地域の人々が少しずつ彼らの想いに気づき、心の中にさざなみを立たせる現象が見られた。これらの反応が当事者たちの自信となり、地域で多文化共生の街づくりを進める「啓発者、指導者」の養成につながるものと考えるが、企画委員らの感想からもこうした成果を読み取ることができる。

今後の計画としては、開花しはじめた事業をさらに地域に浸透させ、実を結ばせる必要がある。今年度の企画委員からは、「まだ自分の想いを社会に発信できていないより多くの外国人市民を企画委員に加えたい」との要望も出された。ただし現段階では、企画委員会などで意思疎通ができる程度の日本語能力がなければ、講演などの形態による社会参加は難しい。次年度は地域で生じた「小さなさざなみ」を、いかに「うねり」にしていくかが

課題である。市や教育委員会の担当課や企画委員の公募をおこなうことで、より開かれた有機的なつながりを得る場としていきたい。

いっぽうで、日本語が堪能でない外国人市民についても、非言語コミュニケーションを通じた国際交流や相互理解を含め、様々な形での地域参加の回路を構築して行くことも今後の課題である。また、すでに講師経験のある外国人当事者ですら、講演の前後に極度に緊張する様子から、外国人当事者が日本社会に対して声をあげようとするには大きなストレスをとまなうということも実証されている。地域の啓発者を養成するためには、彼らのストレスケアをはじめ、当事者が安心して発言できる社会環境を整備していくことが地域社会の側に求められている。

以上に述べた本事業の成果と意義をふまえつつ、新たに明らかとなった課題に取り組むために、今後は行政や近隣大学との連携も視野に入れながら、引き続き当事者の相互理解とエンパワーメントを促進し、より多様な場面で外国人市民の声を発信できる人材の育成をすすめていきたい。

(文責：張茜)

## (11) 事業の成果

### ①他事業との連携

本市の特徴としては、84ヶ国もの多国籍な外国人市民が少数点在で居住するという地域性がある。また一口に外国人市民といっても、留学生や研究者など高い学歴を持つ人々と就労を目的として来日した人々、数年のうちに帰国を予定している人々と中国帰国者や国際結婚のように将来にわたって日本で暮らす定住者などその背景は多様だ。

他方で当地域には居住者の流動性が低く、古くからの地域社会の紐帯が強く保持されているという特性がある。こうした環境のなか、外国人市民は地域の中で孤立しがちであり、また自分の文化や感情を表現することよりも、日本社会のあり様を受容し、これに合わせる術を身につけることを強く求められている。それは国際結婚家庭での家庭内暴力などの具体事象として地域のなかに表出している。

外国人人口が着々と増加し、地域の実態的な国際化がますます進行するなか、本事業は普段、こうした地域社会への「適応」を一方的に求められる立場に置かれている外国人市民が、日々感じている日本社会への本音を語り、同時に地域住民が自らの視点を捉えなおすことで、新しい関係の構築を目指すものであった。

企画委員が行った講演の受講者は、市職員、地域中学校の生徒と当協会の日本語ボランティア、また語学講座の参加者等の市民であった。企画委員は「何回話しても、思わず涙が出てくる」としながらも、被差別体験など自らの経験と抱えてきた想いを語った。また受講生からは、「実体験について辛いことも含めて話していただき、伝えたいメッセージが強く伝わってきた。多様性に対する寛容性がなければ社会の発展もない」、「みんな違うのが当たり前なことがよく分かった」、「小さい頃、目の障害で苛められた自分の体験と重な

った」など共感や感謝の意が寄せられた。普段は「語学講座の講師」などの形でしか接することのなかった外国人当事者から、壮絶な体験とそれに向き合い、乗り越えてきた長年の苦悩を聞いたことは、多くの受講者にとってほぼ初めての体験であり、社会的マジョリティとして生きてきた自らの視点を相対化し、多様性を受け入れるとはどういうことかを問われる機会となった。また市職員、協会ボランティアにとっては、それぞれの仕事や活動を外国人市民の視点から捉えなおす機会となり、中学生たちにとっては外国にルーツを持つ同級生との関係性を見つめなおす機会となった。

また、同時にこうした事業を通して、外国人市民の間に国際交流協会は単に日本語を学ぶ、あるいは支援を受ける場、つまり自らが受動的に関与する場ではなく、ありのままの自己を表現できる居場所、主体的に事業運営に参加できる場としての認知が広がりつつある。本事業を通して、外国人市民からボランティア活動への参加希望の問い合わせが増加するなど、地域への主体的な参加を促す触媒の役割も果たした。

(文責：張茜)

## ②研修後の人材活用

日本語スキルの向上がなければ、外国人市民の高次元での社会参加は現実的には困難であり、今回の事業はすべて日本語を共通語として行った。こうした議論に対応できる高い言語能力を持った外国人企画委員は、それぞれ語学教室やボランティア活動など、すでに地域社会の中で能力を発揮する場を持っていた。しかし、他方で言語能力など表面に現れるもの以外に、本事業をとおして委員らが磨いてきた多文化共生に関する視点やメッセージ性を帯びた表現力は、地域社会に十分に活かされ、評価されているわけではない。今回実施した市職員研修や学校での講演、ボランティア研修などは、彼らの存在を地域社会が自らの財産として認識するきっかけとなった。

(文責：張茜)

### (12) 今後の課題

本事業の企画委員には今後も地域に発信していくことが期待されるが、他方で少数点在地域であることから、活躍する人材が特定個人に偏重しがちであるという課題に留意する必要がある。「こうして人前で話ができる私たちは、ある意味で恵まれている外国人です。でもすべての外国人がすぐにこのようになれる訳ではありません」。外国人企画委員の一人はこのように指摘し、本事業がより多くの外国人市民を巻き込んでいくべきだと主張した。多文化共生社会を実現するために、より多くの外国人当事者が話し合える場や自己を表現できる機会を創る必要がある。今回の企画委員を先駆者として、こうした取り組みのすそを広がっていくことが肝要である。例えば、今回の企画委員が地域で講演するだけでなく、社会に埋れている、あるいはまだ躊躇している他の外国人当事者が、日常的に集まれる居

場所としての機能を国際交流協会が強化し、その中で企画委員らが当事者たちに刺激や気づき、励ましを与えるピア的なコーディネーターとして活躍するような環境づくりも必要だろう。こうした環境が整えば、本事業が生み出した可能性はさらに広がり、持続的な人材育成に繋がっていくことが期待できる。

学校や市職員研修、ボランティア研修などでの講演を経て、外国人当事者たちが「自分には本質的な部分は、語れない／語れなかった」ということに気づき、さらに「それはなぜか」を考えることが課題であることに行きあたったことは、大きな成果であった。が、この気づきをさらに深め、話し合う時間は、今回あまり取れなかった。

また講演準備の企画会議が年末年始の時期となったこともあり、とくに有識者の企画委員の参加が十分に得られず、専門家からの指導や意見交換が不十分となったことは、外国人当事者を「指導者」として養成するという面で課題を残した形となった。

(文責：張茜)